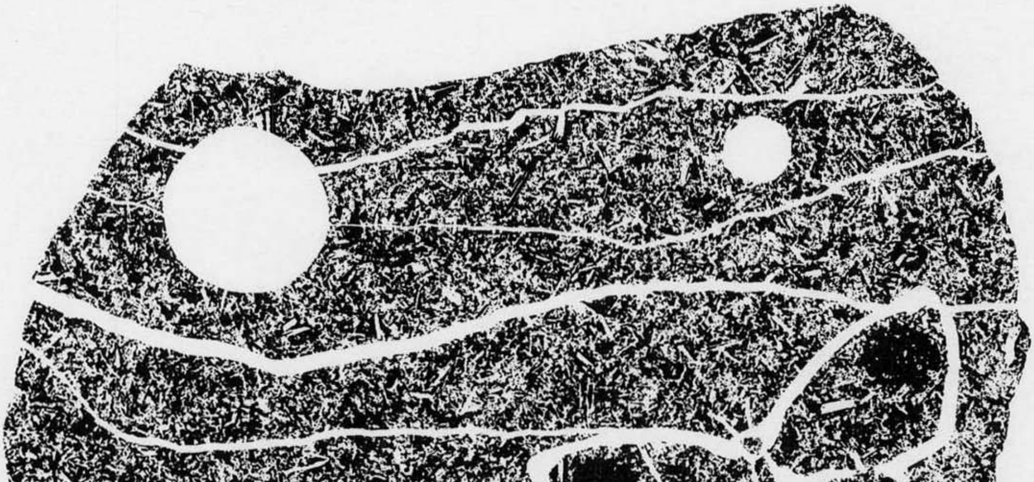
# 月報 岡崎の教育

## 56年度 No.95～106



岡崎市教育委員会

「お父さん　最後までいっしょに
走ろうね」
「なあに　まだまだ負けないぞ」
子どもに励まされての業間マラソ
ン……
きょうは一年一回の父親学級の日

ランニング姿の列に入る
セーターとスポーツウェア姿の父
親たち……

走ること八分間

次のクラスに入りこみ
子どもの列を乱す姿もチラホラ

強い心と体を求めて
暑い日も　寒い日も
走りつづけて十年間
「六南　子」は強かった

昭和56年４月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

（親子マラソン―六ッ美南小）

— 教育随想 —

# 感動

小森辰雄

去る二月十二日から一週間、画廊ラ・ポーラで、交通遺児を励ますためのチャリティ色紙小品展を催した時のことである。

開会の興奮やざわめきが少し静まったころ、小学校二・三年くらいの女の子がその子に顔かたちのよく似た一目で母親とわかる女の人の手をひっぱって、画廊に入ってきた。女の子は早く早くと言わんばかりに前へ倒れるほど手をひっぱっているのに、母親はややそり気味になって恥ずかしそうであった。見ると子どもはもちろん母親も全くの普段着で、そこにいる多くの女性と異なっていたことが母親をためらいがちな気持ちにさせたのだろう。女の子は母親の手を握って楽しそうに語り会いながらあちらこちらの作品を見て一回りすると、入口近くにあったチャリティボックス（善意のお金を入れるためにおかれたガラスビン）を見つけ、その前にたたずんだ。そして十円玉を一枚その中に入れ、ニコッとして母親の顔を見た。母親も笑顔で財布から小銭を二、三枚出してビンの中へ入れた。女の子はスキップをするようにとびはねながら入ってきた時とは違って母親の手をはなして出ていった。そのあとを母親も小走りでついて行く。女の子がボックスの前にきてから出て行くまで二人は全くの無言であった。

私は、今もあのさりげない静かな、そして私の心をゆさぶった感動の光景を思い出すと胸があつくなってくる。言葉こそ一言もなかったが私の心を打った響きは実に大きく力強かった。

今年で四回目になるこのチャリティは年々多くの善意の方々の暖かいご協力によって、ある時は、身体障害者の人たちに、ある年は刑務所に入っている人たちへの愛の手にと、歩んできた。この催しのために、多忙の中を絵や字をかいたり木彫や陶器を作って下さる多くの方々の善意に対して、私はその謝意を口や筆では到底表すことはできない。また、更に催しの趣旨を理解し、貴重なお金を出して買って下さった方の善意にも、心から頭がさがる。

今年は七十八名の方の出品によって、百八十万円余の売りあげがあった。私はその莫大な金額、労力、善意に感謝しながらも、それ以上に、喜んで十円玉を入れてくれた普段着の親子の姿に、一段の感動を覚え、あの日から毎日毎夜、肉体はくた〱に疲れきったけれど、心は暖くやすまった。

善意というものは、たとえその輪は小さくとも、たった一つであっても、心ある人によって、その輪が一つ一つふえ、広がってゆくものだと思う。

二万円足らずのチャリティボックス内のお金が、有り難い百八十万円に劣らないほど気高く見え、人間の心は、基本的には「善」であると、しみじみ感じているこの頃である。

（ポーラ岡崎販売KK取締役社長）

## 海外こぼれ話

### たくましく復興する韓国

澤田昇

三十六年間の日本統治からの解放も束の間、一九五〇年勃発の動乱は、今もなお三十八度線の不穏な緊張として続いている。

しかし、そうした中にあってソウル市民は明るく親切である。そして、質素で勤勉である。朝の六時には町は動き始めるのである。焦土と化したソウルを、目を見張るばかりの近代都市に変容させたのは、悪条件を克服したこうした韓国民の底力と思わずにはいられない。

赤十字活動も甘さがない。難民救済、孤児収容、非行対策等、動乱と共に歩んだ婦女奉仕団、指導者協議会の活動には実績に裏付けられた自信が満ちていた。

ことばには不自由しなかったが「チェトリ（灰皿）」の一言で、女店員の握手攻めに合い、「チェトリ先生」の異名まで頂戴したことと考え合わせ、改めて、“ことばの価値”を痛感させられた。

最後の日、赤十字本社事務総長の、焼肉・麦飯の昼食会で「日本は模範的な民

—ふるさとの山河—

# 巴川いまむかし

筏や、清流に白帆を張った荷船が矢作川同様行き来したという巴川の話を聞いた。巴川は、岡崎の北端を流れる矢作川の支流である。

崖と谷の間に刻まれた細くくねった山道を、重い荷を馬の背に積んだりおろしたりしながら難渋して歩くよりは、たといそれが川舟であろうと、楽で有効な運搬方法であったに違いない。岩の多い巴川ですら交通路として使った先人のたくましさと共に陸路の貧しさを思うのである。

十八世紀になると、巴川の下流、権水（細川町地内）に船番所も置かれるほどのにぎわいだったそうである。

昭和の初めごろまで続いたにぎやかな川のなりわいもぷっつりと絶える。護岸工事、ダムの造成で、巴川自身も姿を変えたが、陸上交通の発達が巴川に静けさを呼び戻した大きな要因であろう。

戦争という非常時は別としても、私たちの暮らしぶりは、昭和三十年代を境に大きく変わっている。このさまざまな分野での変貌を支えてきたのが、実は水であり、川である。

それまで、西三河一帯は、主に矢作川の水に頼って暮らしていた。二十八か所におよぶ井堰や樋管は、ほとんど明治期に作られたものである。これでは、とても需要に追いつかない。おまけに、高度成長や伊勢湾台風による建設ブームは、矢作川の砂をさらい続ける。川底が低くなる。つまり、今までの受益地にすら水を送ることができなくなる。

そこで、国・県・西三河・市が一体となった大規模な水利計画がたてられた。その結果が羽布ダム（S27〜38、三河湖ともいう）や矢作ダム（調査S29〜39、工事40〜46）の建設である。

ここでは、矢作ダムについては省こう。

巴川に、羽布ダムを水源とする細川頭首工が着工されたのは三十七年である。明治用水頭首工左岸で取り入れた水は、トンネルを通り細川頭首工の上流に放流される。ここで本流である矢作川の水が、支流の巴川の水といっしょになる。

細川頭首工で取水した水は、いよいよ長い旅を始める。仁木地内で、サイホンにより矢作川の川底を横断し、右岸に移る。北野に入った水は、ここで二つに分かれる。一つは右岸を南下して鹿乗、碧南・平坂に至る。もう一つは、一号線をくぐり、天白で再び矢作川底を横切って左岸にもどり乙川の水といっしょになる。そして、占部、六ツ美、西尾、吉良、幸田、幡豆、一色へと至る。

巴川は、西三河の人々にとって「母なる川」といっても過言ではないであろう。

（細川小・杉浦鉱子）

主国家にならないでほしい。」と、ポツリと言われた一言が、妙にいつまでも心にからみついてはなれない。

（根石小学校長）

## 対照的な国民性

川津仁子

たった八日間の旅でしたが、私の目に写ったドイツ人、フランス人についてお話しましょう。

ドイツ人は、片言の英語しか話せない私に英語で親切に応待してくれました。（語源の同じものが多いせいか）ふと立ち寄った街角のスタンドバーで、なんとかフランクフルターソーセージを食べようと試みる私に店員さんが二人がかりで応待してくれたこと、きっといつまでも私の脳裏に焼きついていることでしょう。

これに対してフランス人は、自分たちの国を言葉を愛するあまり、明らかに人間を差別（彼らに言わせると区別）しています。肉体労働などはほとんど黒人が従事していますし、もちろん日本人にもあまり好感は持っていないようです。彼らは生活をエンジョイする為に仕事をしているのであって、日本人みたいに休みなく働くことを軽蔑さえしています。

几帳面なドイツ人と明るく遊び好きなフランス人、どちらも日本にとって大切な友人であるはず。これからどう対処していくかが、日本人にとって大きな課題になりそうです。

（南中）

# 新設中学誕生

## 岡崎市立矢作北中学校

**矢作の地に二つの中学校**

肥沃な矢作の里に、新たな歴史の一ページが開かれた。秋の実りが輝く美田。ここに未来を担う若人の殿堂が建った。

**建設の音高し**

冬空のもと、日一日と農地が切り開かれていく。

**雄大な鉄柱**

整地された秋空に向かって、巨大な鉄の柱が林立する。

**完工まぢか**

校舎の輪郭が浮かび上がり、やがて、威容を誇る待望の新校舎がその全貌を現わした。

### 新入生仮入学の日

二十八名の先生と新入生との初めての出会い。胸はずむ顔、顔。先生も背すじを伸ばす。

### 緊張の一日

完工、開校、入学式、始業式。この門、この教室、この友だちと新しい年輪を刻むのだ。

### 訓辞と喜びのことば

校長先生の訓辞にも熱がこもる。一、二年生でスタートする生徒。代表の喜びのことばをかみしめて聞く。

### さあ出発

五百六十二名の生徒の道が、限りない可能性を秘めて待っている。

# 教育日々

## 新出漢字からの広がり

恵田小　近藤正代

「今日は、茶っていう字でしょう。」
「あれ、司朗君もう書きだしとるよ。」
「書き順はいいのか、しろっぺ。」

　こんな子供達の会話の中で始まる新出漢字の学習。

　新出漢字は、一年生では七十六字だったのが、二年生では倍近くの百四十五字登場する。しかも画数の多いのも増えて…。

　漢字を楽しく、しかもより確実におぼえさせようと、一学期の中ごろから朝の会の終わりに毎日一文字ずつ扱っている。筆順、画数の他、音・訓・熟語なども合わせて学習している。時には字の成り立ちも。

★　★　★　★

　熟語の時に、子供たちは一番目を輝かせる。自主的に国語辞典を持って来る子も一人、二人と増え、今では、十五人中九人ほどとなった。

「さあ、チャのほかの読み方は何でしょう。」
「サです。」

　待っていましたとばかり辞典組が答える。

　サの熟語、我先にと挙手。

「きっ茶てんです。」
「知っとる、行ったことあるよ。」
「コーヒーのんだり、プリン食べたりしたよ。」

　全員知っている熟語の場合はいいが、Tの発表した"一茶"には、全員首をかしげるばかり。

「T君に質問。」
と、十四人の手がさっと挙がる。

　必死に辞書をひくT。

「ええとね。江戸時代の……。」

　辞書通りに読んだT、本人も他の子供たちもよくわからない様子。少々補足して、図書館にある一茶の伝記を紹介した。

　早速、長放課にKがその本を貸りて来た。次の日は、T子が、

「家にあったもんで読んでみたよ。小さい時お母さんが死んじゃっただよ……。」
と、目を輝かせながら、話しかけて来た。

★　★　★　★

　枝葉の葉ほどの末端だが、これからも一つの字から多くの広がりをさせて行きたい。

## 席がえ

甲山中　堀田幸彦

　席替えでこんなに苦労したのも初めてだが、得るものもあった。

　新入生を迎えた当初は、手が回らないので、一日も早く顔と名前がくっつくようにと名簿順にするのが通例である。緊張の中で知らない子と隣席しているのが辛いのか、数日後に「先生席替えしない。」と遠慮がちではあったが申し出てきた。若干の不都合を感じていたので、これは幸いと学級会にかけた。案の定、同性の好きな子同志になった。

　男女が真二つ、私語の多いことこの上なし、それではと、独断で諸々の条件を加味して意図的な配置替えを決行したら、またまた不評をかってしまった。

　かといって同じ失敗を繰り返すわけにもいかないので、再度学級会に提案してみた。席替えも環境づくりの一つであり、人間的な触れ合いという点で大切な要素でもあるからと納得させ両者の歩み寄りによって、「席順はくじ、一週間で縦一列が左方へ移動、一か月後改新、希望変更認可」の原則案ができあがった。四月当初見られた小学校別の集団意識も次第に薄れ、学級のまとまりが好ましい方向に向いていった。

　十一月のこと、席が後方に当たった一女生徒から、目が悪いので前方への希望が出た。不遇な子だけに「よしゃ。」と何のためらいもなく前方にいた前副級長と入れ替えをしたことから大事件が発生していた。

　翌日の生活の記録で「先生は横暴だ、ひいきしている。」と攻撃され、被害にあった生徒からも学校なんか行きたくない。日ごろ一人一人を大切にするといっているのは嘘だと突きつけられ、びっくり仰天。

　なんでも数人の子が被害者に同情して涙を流し担任無視の行動に出ることでその場をおさめたとのことだった。大の仲良しの現副級長と席を並べられる楽しみが一瞬にふっ飛んでしまったのがこたえたようだ。平身低頭苦労の末、しぶしぶ了解をとりつけることができた。それ以後は問題もなく、隣席する子を期待しながら日々を送っている。

　他クラスのできごとであるが家庭内暴力や登校拒否で荒れていた男生徒の悩みの一つに異性問題があることに担任が気づき該当の生徒を隣席させたところ日に日に立ち直りが見られるようになってきた一例もあった。

## おしらせ

〔寄贈刊行物・資料等〕

◆岡崎教育史要Ⅲ　岡崎市教育委員会編
◆視聴覚教育誌　岡崎市視聴覚ライブラリー
◆さし木の手引
◆校務主任のしおり　岡崎市福岡中学校

### 昭和五十六年度学校教育の重点目標

# 子どもの理解と自己研修を

教師は子どもとともに伸びるための研修を生涯怠ってはならない。優れた教師の存在が児童生徒をとりまく環境の最大のものである。

そこに教師としての使命の重要性があり、教育愛に満ちた教師が強く望まれるゆえんである。

学校教育への願いは、また、教師への願いでもある。積極的に社会に貢献しようとする人間を育てることをもって、教師の充実感としたい。

本年は、中学校で、新学習指導要領完全実施の年でもある。

岡崎の教育者は、学校教育の目標と新学習指導要領の趣旨を十分理解し、教育者としての使命を自覚し、校長の指導のもとに、子を思う父母の心をこころとし、ひたすら子どもの方を向き、子どものために主体的・創造的な実践を進め、子どもの信頼と父母の期待とに応えなければならない。

本年度の重点は次の如くである。

1　学級の児童・生徒一人ひとりの理解を深める。

2　教科書研究、教材研究の徹底と自己研修に努める。

3　行事の精選、割愛に努める。

**●県知事賞に河合中と東海中**

去る二月二十二日、愛知県主催による「鳥獣保護活動実践発表会」において、両校の発表した活動実績が認められ、それぞれに県知事賞が授与された。

### 昭和五十六年度
## 岡崎市小中学校長会役員決まる

◎小中学校長会

▼会長＝岸田達夫（三島小）▼副会長＝稲垣茂（六名小）▼神谷四士保（南中）浅井浚一（甲山中）▼監査＝柴田保三（生平小）犬塚鎰治（美川中）▼庶務＝内田松夫（広幡小）大原和之（矢作中）▼会計＝柴田清（城南小）栗田昭夫（矢作北中）▼評議員＝岩瀬元（美合小）荻野富義（梅園小）長嶋利一（連尺小）太田憲吾（大樹寺小）沢田昇（根石小）鈴木依治（竜美丘小）杉田富貴男（岡崎小）横井滋（城北中）高橋孝（岩津中）小林績（東海中）渡辺尚三（竜海中）大賀真一（葵中）山本昇（常磐中）

◎小学校長会

▼会長＝稲垣茂（六名小）▼副会長＝長嶋利一（連尺小）沢田昇（根石小）▼監査＝柴田保三（生平小）▼庶務＝内田松夫（広幡小）▼会計＝柴田清（城南小）

◎中学校長会

▼会長＝浅井浚一（甲山中）▼副会長＝神谷四士保（南中）渡辺尚三（竜海中）▼監査＝犬塚鎰治（美川中）▼庶務＝大原和之（矢作中）▼会計＝栗田昭夫（矢作北中）

### 教育者としての誇りをもって
### 今年の新任教師

〔小学校〕

▼梅園－鈴木金利▼根石－藤田理栄子・後藤充人▼男川－鈴木亮子・武藤寿実子▼美合－小野佐由理▼緑丘－柴田雅芳・山本明美・加藤マキ子▼羽根－山崎祐子・川口厚・鳥井裕之▼岡崎－夏目光▼六名－小野田二三江・倉橋恵子▼三島－鈴木涼子・鈴木恵理子・山本武文・土田修義▼竜美丘－金指由香里・田中ゆかり▼連尺－山口まどか・森下一義▼広幡－太田予一・尾崎としえ・嶋崎勝▼井田－今村ひとみ・浅野稔・河合克枝▼愛宕－手嶋勝夫▼福岡－杉浦弘子・三春美奈子・広中絹恵・板倉敏之▼竜谷－渡辺誠・内藤圭子▼藤川－前川きよみ▼山中－伊藤久雄▼秦梨－山田茂・守田洋子▼常磐南－藤野美鈴▼常磐－長岡信志・岩本美紀▼恵田－河辺和子・安枝良恵▼奥殿－太田理恵子▼細川－近藤智子▼岩津－長谷川雄一・小林光枝▼大樹寺－吉岡靖弘・鈴木裕子・東忠▼大門－田中俊二・佐口美代子▼矢作東－奥村洋子・藤井正樹・田村康則▼矢作北－上原由美子・小池剛・近藤義孝▼矢作西－倉地昌子・吉見孝仁・加藤みよ子▼矢作南－牧理子・榊原ひとみ・岡田文男▼六ッ美中部－太田順子▼六ッ美北部－大原裕美・田中俊男・山中浩子▼六ッ美南部－高木理恵・今井洋昭▼城南－湯本通孝・鈴木玲子

〔中学校〕

▼甲山－杉田吉男・太田正文▼美川－山本秀樹・武藤恵子▼南小林千恵美・大山和久・尾藤かなえ▼竜海－尾花久史・谷本裕美▼葵－内藤隆之・白井秀美▼城北－光田啓美▼矢作－伊藤幸雄・片岡明美・大河内史子・神谷あけみ▼東海－永田勲・神谷芳雄・鈴木和人▼常磐－長谷川司吉▼岩津－武田正道・荻須恵美・大戸由紀江・杉浦仙子▼六ッ美－安藤典子・笠原千恵美▼矢作北－菅沼秀光・松井敦子・岡部克彦・小野隆彦

# 雄龍頭

所在地ー岡崎市丸山町

　大平から少年自然の家へ向かうと、東名高速道路をくぐる右手前に、神明宮がある。鳥居からまっすぐ行くと、神明宮第一号墳がある。中の石にベンガラがぬられていることで、知られている。その右側を回って、男川沿いに林の中をさらに進んだ突き当たりが、雄龍頭であった。小さな社と常夜燈のような石碑ですぐわかった。

　岡崎市史によれば、この下の川の中に龍宮があると伝えられている。試しにのぞいて驚いた。男川の流れはゆるやかに渦を巻き、まさに「物凄い」であった。降り続いた雨で茶色に水は濁っていたが、龍宮があるとの伝説も納得できる。

　水際まで降り、少し下流の対岸にある雌龍頭を見に行く。こちらの岩の方が、高さはある。市史に「風流家、酒を携へてここに遊び、三絃太鼓を鳴らし歌うて之を弄する」とあるが、まさに景勝の地である。雨ごいに、祈って袈裟を流し水に巻き込まれれば、雨は必ず降る。その袈裟は信州諏訪湖に浮くなどの伝説も、何だか信じたくなった。

●題　字　岡崎市長　中根鎮夫
●タイトルバック　矢作北中　鈴木由郎
●カット　六ツ美北小　三矢かな江

## この本を

| | | |
|---|---|---|
| ○歳時記考 | なだいなだ　長田　弘<br>山田　慶児　鶴見　俊輔 | |
| 潮出版社 | | ￥ 1,200 |
| ○親ってナンだ、先生って!? | 毎日新聞<br>くりくり編集部 | |
| 三修社 | | ￥ 800 |
| ○学校銭湯論 | 森　隆夫 | |
| 学習研究社 | | ￥ 1,300 |
| ○続折々のうた | 大岡　信 | |
| 岩波書店 | | ￥ 380 |
| ○日本語はどう変わるか | 樺島　忠夫 | |
| 岩波書店 | | ￥ 380 |
| ○天声人語 I<br>1945. 9～1949. 12 | 嘉治　隆一<br>荒垣　秀雄 | |
| 朝日新聞社 | | ￥ 360 |
| ○天山南路の旅 | ＮＨＫ取材班 | |
| ＮＨＫ | | ￥ 1,700 |
| ○すてきなあなたに | 暮しの手帳 | |
| 暮しの手帳社 | | ￥ 1,200 |
| ○神聖喜劇全５巻 | 大西　巨人 | |
| 光文社 | | 各￥ 1,400 |
| ○万葉群像 | 北山　茂夫 | |
| 岩波書店 | | ￥ 380 |

## オアシス

　オッとしまった。今晩は、「岡崎の教育」の編集会議だった。忙しさに、つい忘れてしまった。「オアシス」を書かなくては。今度は「オ」だったかな。「オ」で始まるいい言葉はないかしら。辞書を見たり、本をさがしたり。

　ああ、ことしも18字×8行の「オアシス」に悩まされそうだ。

　四月、花、桜。岡崎市中が花盛り。伊賀川堤も稲熊まで桜並木が貫通し岡崎公園をしのぐ見事さ。花の世界もドーナツ現象を起こしている。

　桜といえばソメイヨシノと相場は決っているようだが、山奥に咲くヤマザクラの紅色を帯びたえび茶の霞も、得も言われない趣がある。

　新しいスタート。ピッカピカの一年生。最近は子供の数も少なく、文字通り新品づくめの一年生。あどけない顔に希望と不安の入り交じった新鮮さがある。

　今年度も数人の新任教師を迎えて、とたんに先輩顔のふえた職員室。教師もおのずから責任と期待感に思わず身を引きしめる時でもある。

　すがすがしい青空に、子どもの声が広がっていく。顔や体は同じでも心はみんな新しい。

　新緑の配色のみごとさは、人間わざではできぬもの。自分と人とを欺かず、時来れば芽吹く草や木に驚くばかり。

　素直な子どもがすくすくと育つために
さあ、心の栄養を蓄えよう。